

病弱TS少女になった俺
が大洗女子学園で戦車
に乗るお話

HANAMINA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

改名前↓病弱TS少女になったけど何とかして戦車道に関わりたい

改めて見るとタイトルに違和感あったので変えました。

TSしたオリ主が病弱設定をどうにかして戦車道をしようとするお話

今回初めてここで作品を投稿するので何かと拙い文になってしまいかもしれませんが優しく見守っていただけると幸いです。

誤字脱字報告大歓迎です。ただ私のメンタルはガラス以下なので優しくお願いします（傲慢）

感想を送ってくださると、作者が狂喜します。

目次

いつの間に転生したん？	1
生徒会活動開始です！	11
廃艦の危機、そして主人公の登場。……これって嫌われ展開？	18
運命の時。告白っぽいねこれ。	25
分からせされた次の日	35
生存報告く非小説（オリ主プロフィールを添えて）	44
サボり後の学校ってきまずいよねって話	50
もしかして私ってぬいぐるみか何かか？	60
あ？	

抽選会、そして煽り合い	65
サンダース戦前	75
サンダース戦（ダイジエスト）	80
DOKI DOKI！アンツイオ高校潜入（無許可）	89
アンツイオ潜入くキャラ崩壊を添えて	98

いつの間に転生したん？

朝起きたら赤ん坊になってた。

な ん で ？

「これはいわゆる転生というやつか？外観の見た目は普通の一軒家だけど異世界ではないのか…

普通にもう一回現代社会の人生を歩むとかいやだなあ…

まあ前世分のいろいろな貯蓄もありますし、少しはイージーモードかな？

「おぎゃあ（うまく喋れん）」

「あら〜おしめ交換かしら？」

一先ず言えることは恥ずかしすぎてもうお婿に行けない…（剥かれた後）

○月×日

今更知ったのだが俺は女らしい。つまり女らしいように行動しなくてはいけないのか。恥ずかしすぎて死にそう…あるべきものが無かった時はギャン泣きした…その後母親が来てまたオムツを剥かれたのは言うまでもなく…

△月×日

テレビを見て知った。ここガルパンの世界や。なんか戦車道の話してたわ。

ガールズ&パンツァー

みぼりんが大洗女子学園で復活した戦車道で優勝を目指していくお話

まさか、その世界に転生するとは…！こんな戦車道やるしかないやん！誰だか知らん神様！女に生まれさせてくれてありがとう！

はしやいでたら変な目で見られた、泣きたい。

〇〇月×日

転生してから早数年。小学生になったTS少女こと俺、おのでらゆい小野寺唯は…なぜか外で遊ばせてくれません。なんで？

親曰く、俺は体が生まれつき弱く倒れてしまうから外で遊ぶなどのこと。

てなわけで家で本を読むしかないんですねこれが。暇ですな。

まあ色々禁止されている俺ですから必然と友達はできずにぼつちに…べ、別に悲しくなんかないだからねっ！

ん？これ戦車道できなくね？

○月○日

中学生になった

まぼりんテレビで見た

計算すると俺まぼりんと同じ年だった

こんな運命やん！意地でも戦車道しなきゃ…でも親がなあ

と、いうわけで高校では一人暮らししましょう。そうすればバレへんやろ（適当）
なおそう息巻いてトレーニングしてたら吐血した。親に怒られた。ぴえん。

そんなこんなで俺高校生！ちゃんと大洗に合格し、晴れて入学しました。もちろん満点。人生二周目ですしおすし。伊達に一流大学卒業してないからな。そして同時に戦車道に関わるための布石を用意せねば…そう考えると

「普通科1年、小野寺唯さん。生徒会室まで来てください」

と、入学早々呼び出しを受けた。なんでや俺何もしてへんやろ！

「失礼します」

「遅い！何をしていたんだ！」

「お、きたねえ唯ちゃん」

「すいません。まだ道をわかっていなくて」

「ふん！以後気をつけろ」

「もう桃ちゃん！急に呼び出しちゃったんだからすぐに来れないのはしょうがないですよ！ごめんね唯ちゃん、入学早々呼び出して」「桃ちゃん言うな！」

「いえ、問題ないです」

おおおおおおお!!!ガルパンのキャラが目の前でしゃべってるう！感動するう！

っていかんいかん。平常心でいなければ…ガルパンのキャラに変態って思われたら

泣く自信がある。それもギャン泣き。

「じゃあさっそく本題なんだけどねえ。唯ちゃん生徒会入ってね、これ決定だから」

「は？そんな横暴な」

「君体弱いんだよね？体育とかは危険だからできないって聞いてるよ。かと言って単位困るよねえー？生徒会入ってくれたら多少は見逃せるんだだけどなー」

「…」

「こ、怖いなあ。そんなに睨まないでよ」

いや睨んでるわけではないんだけど。むしろ余計に感動しているわけで…こんな所で原作に関わる事ができるなんてありがてえ！しかも体育免除！こんな優良物件受ける以外ないやろ！これで戦車道に関われる！

「分かりました…逃がしてもくれなさそうですしね」

「物分かりがよくて助かるよー。じゃ、明日からよろしくね唯ちゃん」

「しつかりと働くんだぞ。怠けるのは許さんからな！」

「もう桃ちゃん！…よろしくね唯ちゃん。桃ちゃんも素直じゃないだけだから」

「だから桃ちゃん言うな！」

「よろしくお願いたします」

そんなわけで俺は入学早々生徒会にはいるわけとなった。あれ、なんか大変な役目を

背負った気がする……

今年の入学生に面白そうな子がいた。入学試験を満点合格した二人のうちの一人、小野寺唯。

写真を見ると高校生とは思えない程、幼く見える……。白い髪に翡翠の様な目、正直とても可愛らしい。

書類を見るとどうやら体が弱いらしいどれぐらいかは聞いてないけど体育は難しいらしい。まあどれぐらいかは生徒会に入れてから判断しよつか。それに面接のときここを選んだ理由が『なんとなくここじゃないとだめだと思ったから』だなんて……面白すぎでしょ！

「失礼します」

お、来たようだ。いったいどんな子なのやら。

「遅い！何をしていたんだ！」

「お、きたねえ唯ちゃん」

「すいません。まだ道をわかっていなくて」

「ふん！以後気をつけろ」

「もう桃ちゃん！急に呼び出しちゃったんだからすぐに来れないのはしょうがないでしょ！ごめんね唯ちゃん、入学早々呼び出して」「桃ちゃん言うな！」

「いえ、問題ないです」

…思ったよりクールな子だねえ。身長小っちゃいけど。それにカリスマ性のある雰囲気醸し出される。将来大物になりそうだ。小っちゃいけど。

…幼い見た目でかつこいいいなんてギャップ凄いなこの子。

めんどくさいのは嫌そうだし本題に入るか。

「じゃあさっそく本題なんだけどねえ。唯ちゃん生徒会入ってね、これ決定だから」

「は？そんな横暴な」

「君体弱いんだよね？体育とかは危険だからできないって聞いてるよ。かと言って単位困るよねえ？生徒会入ってくれたら多少は見逃せるんだけどな」

「…」

っ!!

「こ、怖いなあ。そんなに睨まないでよ」

「分かりました……逃げがしてもくれなさそうですしね」

「物分かりがよくて助かるよー。じゃ、明日からよろしくね唯ちゃん」

「しっかりと働くんだぞ。怠けるのは許さんからな！」

「もう桃ちゃん……よろしくね唯ちゃん。桃ちゃんも素直じゃないだけだから」

「だから桃ちゃん言うな！」

「よろしくお願いいたします」

あの子は凄みがある……！睨まれた時思わず竦んじやったよ。あの子は想像以上かもしれないね……勧誘して正解だったよ。

「いやあ。良い子を見つけたよ我ながら」

「なんとというか、凄くかつこ可愛かったね。小っちゃいのに大人びてて、少し怖いって思っちゃった。仲良くなれるといいなあ」

「ふん、仕事ができれば別に構わん！」

「もう…桃ちゃんやめなよそういう事言うのは」

「とにかく！あの子は体が弱いらしいし、色々支えながら慣れさせよっか」

「はっ」

ホントにいい掘り出し物を見つけたものだよ♪

生徒会活動開始です！

前回のあらすじ

生徒会入ったった。

どうも、生徒会に所属し、無事に原作介入ルート確定しました。小野寺唯です。

あの日は嬉しすぎて帰った後狂喜したのは言うまでもなく……あ、その後ぶっ倒れるのも込みで。

生徒会に入ったからと言ってまだ問題は残っている……だがしかし！そんな障害俺の野望の前では敵ではない。

俺の目的、それは……

【原作介入しつつ傍観勢でいること】

せつかくアニメの世界に転生したんだからストーリーに関わりたくないやん？でも自分がいることで優勝できなくなるとかは嫌なので、関わりつつ一定の距離感を保っていきたい！

しかしそのためにはこの病弱な体が枷になってしまう……まず戦車道に関われなければ論外なのですよ。

と、言うことで戦車道に関わるためのプランA!!

運動できることを認知してもらう！

先輩方が二年である現時点では廃艦の話は来ていないからまだいいが、来年までに俺が運動OKなのを確認してもらわないと戦車道が復活しても参加させてもらえない可

能性大：…なので一年の時から上手く騙せれば

「ぐわー廃艦の危機だー。…そうだ、戦車道しよう（情緒不）」「あ、私ももう体は大丈夫だから参加できますー」

「ホントー？じゃあいつしよにガンバろー」

「ヤッター」

的な感じになるはず!!（適当）

てなわけで積極的に雑用をこなしていたのですが…

「唯ちゃん無茶すぎ！こんな倒れるまで頑張らなくてもいいんだよ！」

「会長の言う通りだ！貴様病弱なのを分かっているだろう！自分を少しは労われ！」

「今後は書類関係だけでいいから！とりあえず今日は送るから帰るよ唯ちゃん！」
「す、すいません…。」

何故こうなつた？（血涙）

「改めまして、普通科一年、小野寺唯です。書類等で体が弱いのはご存知だと思います。最近では体を動かす訓練をしておりますので今はある程度（さじ加減）運動はできます。」
彼女が生徒会に入った次の日、改めて自己紹介をすることとなった。彼女は体は少し良くなったと自分で言っていたが：彼女大丈夫かなあ？嫌な予感がするよ。
「やるからには徹底的にやりたいと思います」

というので主に雑務をやらせてみる。そうしたらすごい勢いで終わらせていく。おいおい大丈夫かなあ。張り切りすぎでしょ：：自分で誘った方がいいが不安だ：：倒れなきやいいけど。

：お手伝いをする妹を見守る姉みたいな気分だよ：

会長はかなり唯のことが心配なご様子だが：：まあ確かに働きすぎな気もするか：：無

理をして倒れられても困るし、程々にするように注意しなければ。

あいつは焦っている様に見えるが…何かあるのか？

まあ仕事熱心なのは良い事ではあるな…最初は少し威圧的過ぎたかな？体が弱いらしいし少しは優しくしないと…？べ、別に完全に認めたわけではないぞ！

…なんだか妹が増えた感覚だ…

もう！あれだけ無理しないでねって言ったのに！

皆節々に心配してただけどやっぱ唯ちゃん倒れちゃった…倒れた唯ちゃんを見つけた時は吃驚したよ…

「唯ちゃん無茶しすぎ！こんな倒れるまで頑張らなくてもいいんだよ！」

「会長の言う通りだ！貴様病弱なのを分かっているだろう！自分を少しは労われ！」

「今後は書類関係だけでいいから！とりあえず今日は送るから帰るよ唯ちゃん！」

「す、すいません…」

まったくもう！これから要注意ね！唯ちゃんが無理しないか監視しなきゃ。

……なんだか妹の面倒を見てるみたいでいいかも…

なんだかぶつ倒れた一件から皆さんが過保護な気がする。

「唯ちゃん。無理してない?ちよつと休憩する?」

「唯!無理するなよ。倒れられるとこつちが迷惑するんだ、丁度我々も休憩しようと思つていたし無理にでも休んでもらうぞ」

「紅茶に茶菓子も用意したよ。休憩しよう?唯ちゃん」

「い、いえ…まだ仕事が」

「唯(ちゃん)?」

「ウツス」

「圧が強い…逆らえないゾ…」

結局休憩した。決して甘いもので懐柔されたわけではない。断じて!

まずい…このままでは運動系の労働を一切禁止されてしまう…来年にはもう戦車道が始まるつてのに…!いや?まだ先だな。大丈夫か。(楽観視)とりあえず先輩方が優しくてとても良い職場です、はい。学校だけど。

最初は唯ちゃんのこととはクールで口が少ない子かなと思っていたけど、休憩中の彼女を見て考えを改めたよ。あの子は無理して大人びているようにしているだけっぽいね。茶菓子を食べている時の彼女は思わずこつちがドキドキしてしまうような可愛らしい笑顔だったよ。本当の彼女は見た目よろしく幼女のような可愛い性格なのだろうね、しかも気遣いができるとても良い子だ、つまり何が言いたいかというと…

たくさん愛でたい…！しかし体が弱いのに頑張ろうとする姿は可愛いがまた倒れるとこつちが焦っちゃうよ。絶対に無理させないようにしよう。河嶋も小山もあの子に対して同じように思っているようだしね。

なんで分かるかって？二人とも顔だらけてるよ…隠せないからね…。はあ私もか。

廃艦の危機、そして主人公の登場。…これって嫌われ展開？

前回のあらすじ

やらかした

どうも、もうすぐ二年生。小野寺唯です。

私は今文部科学省に來ています。皆さんご存知、廃艦の危機です。

「そんな!!横暴です!!」

「と言われましても、もう決まったことなのですよ。大洗女子学園は目立った成績もな

いということでも費用削減のための解体になるんです。諦めてください」

このような会話を繰り返しているのは我々が生徒会長角谷杏バイセンと皆さんご存知こいつさえいなければ…の辻役人。いやあアニメでも中々にウザかったけど、リアルでこいつを見ると殴りたくなるウザさですねえ。白々しいったらありやしない。

「…なんですか？ 睨まれてもこの話は変わりませんよ」

「…いえ」

「…実績があればいいんですよ？」

さあ、いよいよ来ましたね会長の無茶ぶり交渉！ なんだかんだ言ってカリスマ性があるからこそこそでできる決断ですよ。かっこいいぜ会長！

「…今年中に実績が作れるとでも？」

「まさか戦車道の優勝校を廃校にはしませんよねえ？」

「なに？」 「会長!？」

「我々が戦車道で優勝した場合には！ 大洗女子学園の廃艦はあり得ませんよね？」

「…優勝出来たらの話ですがね」

「では！ 優勝しますので、その暁には。よろしく願います」

「では、失礼いたします」

ちゃんと原作通りになつてて安心安心。

「会長!!無茶です!戦車道で優勝など!」

「確かに昔戦車道をやっていて戦車が残っている形跡があるとは言っても…」

「それでも!!…やるしかないんだよ」

「…私は会長の案は最適だと思えます」

「唯!貴様とち狂ったのか!」

「あのまま下手な交渉を続けていても、あの役人相手では決定は覆らなかつたでしょう。それなら、多少は無茶でも、相手がn oと言えないような一手を打った会長はいい判断だったと思います。それに中途半端な実績でもあの役人ならそれがどうしたと決定を覆しはしないでしょうね」

「むう…」

「…ありがと唯ちゃん。ということだし、早速戻って戦車道の準備を進めるよー」

「はる」「はる」

「会長、私のクラスの名簿を確認していたのですが、このような人物が…」

「…へえ、西住流の娘か。そういえば最近転校してきたね」

「この人に戦車道を履修させない手はないかと」

「そうだねー。じゃ、同じクラスだし西住ちゃんの件は唯ちゃんに任せるよー」

「はい…はい？」

「ん？どうしたの？」

「いえ…こういうった込み合った話は会長自らするべきでは？」

「本来ならばそうなんだろうけどねー。多分お願いするだけでは無理なんだよ。何故かわかる？」

「彼女の転校の理由ですか？」

「ご明察。黒森峰の件がある限り、西住ちゃんは戦車道に対していい思いはしないだろうね…でもこっちもとやかく言ってられないんだ。本当なら最低なことだけど…脅し

「でも履修してもらおうよ。」

「…」

「嫌な役目をさせちゃってごめんね。最終的には私がケリをつけるから…」

「…はい」

「ごめんね。今度なにかおごるよ」

「…」

「いえ…その代わりといっちは何ですが、私も戦車道に出さしてください」

「…何言っているの唯ちゃん。体弱いのがわかってるよね？ダメだよ。絶「私は！」…」

「！」

「少なからず一年間、先輩方と一緒に過ごしてきました！なのに私一人だけ…」

「唯ちゃん…」

「それに戦車には4人は欲しいんですよ？3人では操作が大変になってしまいます。通信手なら肉体的な疲労はありませんし、大丈夫です！」

「…」

「何を言っても無駄ですよ。もう決めましたから」

「…分かったよ。ほんとに頑固なんだから」

「はい、私は頑固者ですよ？知りませんでした？フツツ」

あれ、これ嫌われるくね？

「…だから、西住みほには戦車道を選択してもらおう。無理にでも」

「みぼりんは戦車道はやらないって言ってるでしょ！」

「唯さん。いい加減諦めてください。みほさんの意思は変わりません」

ちくしょう（血涙）

運命の時。告白っぽいねこれ。

前回のあらすじ

戦車道履修ルート確定

みぽりんに嫌われる

どうも、二年生になり遂に原作が始まりましたね。小野寺唯です。
さてここでクイズです。私は今どこにいるでしょうか？

答えは…

「…だから、西住みほには戦車道を選択してもらおう。無理にでも」

「みほりんは戦車道はやらないって言ってるでしょ！」

「唯さん。いい加減諦めてください。みほさんの意思は変わりません」

あんこうチーム（仮）の目の前にいます。

何故だ…！何故こうなった…？こんな…こんなはずでは…！！

あんこうチーム（仮）と話をするちよつと前

しまった…同じクラスなんだからこうなる可能性があつたはずなのに考えていなかった（バカ）

とりあえず威圧にならないようにみほりんをそれとなく戦車道に勧誘する方向で…
先ずは話をしなくては…昼休みに少し話しかけるか…

「西住みほさん」

「ひゃ！は、はい」

「放課後、話がある。大切な話だ。屋上で待つてる」

「え、はい？」

「じゃあ、私は失礼する」

ザワザワ…

『あの子確か生徒会だったよね。西住さんにいったい何の用かしら』

『あの子が積極的に話しかけるなんて…きつとよほどの事よ…』

「え…」サアーツ

「み、みほりん大丈夫だよ！私達も一緒に行くからね！ね、華！」

「はい。一緒に行きますから安心してください。みほさん」

「二人とも…ありがとう…」

.....!!?

…何故そうなった!? 何故そうなった!? 俺そんなつもりで言ったわけじゃないんだけど! 何であんな雰囲気になってんの!? ↑陰から見えた

ヤヴァイ…この勘違いのせいで一気に俺の評価はガタ落ちじゃないか! 生徒会か! 生徒会のイメージのせいかな!? それとも俺か!? 俺だねごめんなさいね!! だってこの体全然柔らかい喋り方してくれないもん! 基本言葉数少ないし喋ったと思ったら堅い話し方だし…! 生徒会の人たちとならだいぶ話せるんだけどなあ…。話を戻そう。このま

までは原作通りみぼりに断られてついでに二人にボロクソ言われて俺の心がブロウクンハートして終わる…。どうにか…どうにか…！

できませんでした／＼(。o。)\

そんな訳で断られてついでに二人にボロクソ言われて俺の心がブロウクンハートしている状態です。前世込みで40歳越えの人が女子高校生二人に言い負かされている図を想像していると目から水が…

「生徒会なんか全然怖くないんだからね！あなた達なんか絶対従わないんだから！」

「いい加減に諦めてください。なぜ本人の意思が優先されないのですか」

「あの…小野寺さん。ごめんなさい！やっぱり…私は戦車道できません」

あ、もう無理泣く。

「…」

「えちよ、ちよつと！そんな泣かなくても…」

「すいません！言いすぎましたか!？」

「あ、ご、ごめんね小野寺さん！」

「…いえ…」

みじめだ…ホントに…（悲）

昼休みに同じクラスの小野寺唯さんに呼び出された放課後、沙織さんと華さんと一緒に屋上に向かった。

「…やっぱり緊張する〜」

「大丈夫だつて！私達もちやんとついてるから！」

「はい、安心してください。みほさん」

「ありがとう。…じゃあ行こうか」

「…来たか。…？二人もいるのか」

「迷惑ですか?」「いや、好都合」「…?」

「本題に入らせていただく。西住みほさん、あなたには今年より復活する戦車道を履修してもらおう。これは決定事項だ」

「…え?」

戦車道? 戦車道がない高校だと思つて転校したのに、また戦車道をするの…?

「みほりんが戦車道?」

「もしかして、みほさんは戦車道を経験していらつしやるのですか?」

「…うん」

私は、この場で転校してきた理由を話した。二人にはあまり知られなくなつたけど、この状況では説明せざるを得ない。

「そうだったんだ…じゃ、じゃあみほりんは戦車道をしたくないってことでしょ? なのに生徒会はみほりに強制させようとしてるの!? そんなの横暴じゃん! 許せない!」

「しかも、みほさんを知っているという事は、事情を知った上での話の様ですね…」

「…」

「あの、小野寺さん。私、戦車道はやれないん「聞いていなかったか?」ツ!」

「これは決定事項だ。だから西住みほには戦車道を選択してもらおう。無理にでも」

「ちよつと! みほりんは戦車道やらないって言つてるでしょ!」

「唯さん。いい加減諦めてください。みほさんの意思は変わりません」

「…私は本人に言っている。どうなんだ、西住みほ」

二人がこんなにも私の事を思ってくれている。それがとても嬉しい。私も勇気をださなくちゃ…！

「…ごめんなさい!! 私は…私は戦車道はしません!」

「…何?」

「ほら、言ったでしょ! この話はこれで終わりでしょ!」

「そうはいかない。こちらにも「そろそろ限界ですよ唯さん」ッ!」

「いくら生徒会でも、本人の意思以上に優先されていいはずがありません。」

「生徒会なんか全然怖くないんだからね! あなた達なんか絶対従わないんだから!」

「いい加減に諦めてください。なぜ本人の意思が優先されないのですか」

「あの…小野寺さん。ごめんなさい! やっぱり…私は戦車道できません」

「…」

自分の意見を伝えるのに必死になっていると、小野寺さんが俯いて小刻みに震え始めた。…もしかして泣かせちゃったの!?

「えちよ、ちよつと! そんな泣かなくても…」

「すいません！言いすぎましたか!？」

「あ、ご、ごめんね小野寺さん！」

「…いえ…」

どうしよう…！小野寺さん小つちやいし見た目が…なんというか子供に近いから余計に罪悪感が…！

「グスツ…ウ…」

「ほ、ほんとにごめんね小野寺さん！私達、いじめるつもりはないんだよ！寄ってたかって言い張ってごめんね！」

「ど、どうしよう華あく！」

「と、とにかく泣き止ませましょう！それで、もう一回謝りましょう！」

「…グスツ…ううう…」

な、泣き止まない…！こ、困ったな…

「…ヒグツ…かえる…」

「え！う、うん。だ、大丈夫？」

「ほ、ホントにごめんね唯ちゃん！」

「良ければ送りますよか…？」

「いや…必要ない…グスツ…」

そういつて小野寺さんは帰っていった。残った私達には気まずい雰囲気は…

「ど、どうしましょう。唯さんの見た目が小つちやいだけあつて凄い罪悪感が残るので
すが」

「ううう。明日報復とか来ないよね？」

「ど、どうだろう…？」

「何とも言えない気持ちで私達は帰った。…明日もう一回謝ろう。」

分からせされた次の日

前回のあらすじ

【悲報】精神年齢40歳越え元サラリーマン、JKに言い負かされて泣く

どうもこんにちは。女子高校生に泣かされて帰ってきました。小野寺唯です。

もう学校行けない……! あんな口論だけで泣かされた挙句、一周回って慰められただな

“朝チユン！朝チユン！”

…ん。朝か？ていうか何だこの効果音。一人暮らし朝チユンもクソもないだろう。

さて、今は何時かな？…頭痛い。

15:00

…
???? もう一回見るか。寝ぼけてんだろきつと…

15:01

おっふ

小野寺さんを泣かせちゃった次の日、謝ろうとドキドキしながら学校に行くと、いつ

も早くから居るはずの小野寺さんが居なかった。

「唯さん、いませんね」

「ど、どうしよ〜！」

「さ、沙織さん落ち着いて！ほら、まだ来ていないだけかもしれないから！」

そう思っていたかったけど…

「ほら、みんな席について〜。…あら、小野寺さんはまだ来ていないの？連絡がないのは珍しいわね。彼女体が弱いから其処ら辺ちゃんとしているのに…」

「…え？」

小野寺さんって体が弱いのか？どうしよう…！私たちのせいかも…！

そんなことを心配しながら着席すると先生がHRを開始する。

「今日はこの後選択授業の説明会があるので、その後何の授業を選択するかを決めていただきます。では、早速ですが体育館に移動してください」

これって、昨日小野寺さんが言っていたことだよね…

結局小野寺さんは学校には来なかった。私はやっぱり戦車道は選択しなかった。小

野寺さんには申し訳ないけど、私には勇気がなかった…戦車道にもう一回関わる勇氣は…。だけど、放課後に生徒会に呼び出されてしまった。沙織さんや華さんも付いて行つてくることになったが、やはり今日の授業選択の事だろう。怒られるのかな…二人は付いてきてくれるけど、やっぱり不安だな…。

「失礼します」

「来たねー。西住ちゃん」

「早速だが…これは何だ？」

そういつて広報の河嶋先輩が見せてくるのは私の茶道にチエツクが入った授業選択の紙。やっぱりそのことだよね…。

「唯から、戦車道を選択するように聞かなかつたのか？」

「聞きました…だけど！私は戦車道は選べません！」

「何い！貴様！生徒会長の決定に逆らうのか！」

「ひっ！」

「先輩！そんな言い方は無いんじゃないですか！いくらみぽりんが戦車道の経験者だからって強制される事はおかしいと思います！」

「私も同意します。選択の自由は生徒にあつて然るべきです！」

「外野は黙っている！」

「ちよつと桃ちゃん…あのね、悪いことばかりではないんだよ？ほら、特典もたくさんあるし」

「まあ、そこまで抵抗されちゃあ、こつちも色々手を出さざるをえないんだよねえ。具体的には、西住ちゃん。この学園艦にいられなくしちゃうよ？」

「「!?」」

そんな…せつかく友達ができたのに、別れるなんて嫌だよ…。

「そんなの横暴です!」「そうよ!無茶苦茶よ!」

「まあ、最後の決定は西住ちゃんにあるから。で、どうする?西住ちゃん?」

沙織さんや華さんが必死に説得してくれている…。でも恐らく変わらないよね…。
だったら、せつかく友達と別れるよりも…!

「分かりました。私、戦車道します!」

「えええ!いいの!?!みぼりん!」「みほさん…よろしいのですか?」

「うん。二人とも、ありがとう」

「いや〜良かった良かった。これでこの件はおしまい。」

「え、この件?」

「そ、この件。正直こつちが本題って言っても過言じゃない。」

「唯ちゃんが今日学校に来てないのは知ってるよね?」

「っ！は、はい」

「唯ちゃんは体調を崩しやすいから、そこんところの連絡はすごいしっかりしてるんだ」

今朝、先生が言っていたことを思い出す。なるほど。

「それを踏まえて聞くよ？」

「昨日、何唯ちゃんに何をしたかがあつたの？」

「「ツツ」」

さつきよりも何倍も強い圧力：！？昨日は…昨日は…

… 私たちは昨日会った出来事をそのまま伝えた。その間の会長や他の先輩方の視線がとても怖かったけど…。

西住ちゃんに、昨日のことを聞いた。

「なるほどね、それで唯ちゃん泣いちゃったんだ。」

「は、はい…あの、ごめんなさい。今日、もう一度すっかり小野寺さんに謝ろうと思っていたんですけど」

唯ちゃんは泣かされて帰って音沙汰がないだけらしい。だいぶ不安ではあるけど、最悪のケースでなくて何よりだよ。

…にしても、あの唯ちゃんがね。仕事上では子供っぽいところは見せないと思っただんだけれど（もちろん気の抜けた時は見た目相応の子供）、なるほどメンタル面もそこまで強くないのか。1年一緒にいて初めて知ったよ。今後はあまりメンタル面に来るとような仕事は避けてあげよう。決して過保護というものではない。断じて。

「まあいいよ。一応こつちにも非はあるし、また今度唯ちゃんに謝ってあげてね」

「は、はい。それはもちろん」

「それと！唯ちゃんはあくまで私の命令で今回の事をしただけだから、唯ちゃんとは仲良くしてあげてくれるかな？」

「えあ、はい！」

「じゃあ、この件もおしまい。帰っていいよ」

「ぶ、なんか納得いかないけど、みぼりんがいいならいいか！」

「はい。みぼさん。戦車道でもよろしくお願いしますね」

「うん！」

そういつて彼女らは去っていった。

「まさか唯が泣かされているとは…」

「意外だね。全然そういうの効かなそうな性格しているのに（気が抜けている時を除く）」

「まああの子なら、また明日けろつとして学校に来るでしょ。かーしま、唯ちゃんに今日の事連絡お願い」

「分かりました」

まあ、西住ちゃんを引き込めたし、出だしは成功かな？ まだまだ問題は山積みだけど、なんとなるでしょ！ それよりもどう、安全に唯ちゃんに戦車に乗せるか…こっちの方が重要だね。

・・・やっぱり過保護かもしれない。

生存報告く非小説（オリ主プロフィールを添えて）く

どうもHANAMINAです。

まず謝罪を…

誠に申し訳ありません!!!!!!
—\O—

私は今専門学生なので掛が、今検定までの勉強があまりにも難しすぎて…今まで投稿する気が起きなかつたのです…↑クソザコナメクジ

生存報告として、ここで未完のまま終わらせるつもりは無いので、待つてくださる方は11月半ばが検定なので長いですが頭のほんの片隅にこの作品の存在を留めていた
だけると幸いです笑。

おう、簿記1級キツすぎるんだが？（半ギレ）

→

てなっている状態なので頭の悪さは察してください：

本来ならここで終わりなのですが書いてて気付きました。

これ1000文字書かんといかんやつや、どうしよう

(考え無し)

て、ことなのでオリ主のプロフィールでも書きましようか。これで絵描いてくれる人がいつか現れるって古事記にも書いてある。

オリ主プロフィール

名前：小野寺 唯

身長：120cm

※ちなみにカチューシャは124cmとカチューシャよりも身長が低い

白い髪に翡翠の目、肌はかなり白い

ツリ目気味で見た目はクールに見えるが身長のせいで一瞬でイメージが瓦解する

元一般ブラック会社員の転生者

一流大学卒業したのにブラック会社に勤めるとかカワイソス

いつも通りサービスマンが終わり家に帰り寝て起きたら転生済み。何だこのキューピー感

原作に関わりたいたいけどバタフライ・エフェクトが怖くて端っこにいるぐらいの距離感を保つていたいヘタレ君

本人はやるとなったら完璧にやりたい主義でそのせいで転生前は仕事が増える原因だった性格は転生後も健在

そのせいで生徒会の初仕事を張り切りすぎてぶっ倒れた

そのせいで生徒会の過保護具合が悪化

そのせいで周りに生徒会の中で重宝されるやべーやつと勘違いされる

テラワロス

本作品の意義として非常に病弱貧弱貧弱ウ！

撃てば必中（腰に）守りは紙、進む足は千鳥足（満身創痍）

な雑魚具合

嘘です。砲撃だけでそうなられたらこっちが困ります。

それはそうと走れば過呼吸、隙あらば風邪をひく。

球技は完璧な運痴。な雑魚具合なので生徒会チームはいつもハラハラきつと他の皆もハラハラするようになるに違いない。

そうしてみせる（鋼の意思）

本人は元社畜なので体調不良であろうと仕事しようとしています。いやだねブラック企業ってのは…

カメさんチームの通信手に任命

なに？装填手空いてるだろって？病弱っ子に重い砲弾持てるわけねえだろ!!てことで装填手は桃ちゃんに兼用してもらいましょうね〜

以上プロフィールでした。

では今度は11月に会いましょう。

最後にですが、

シンフォギアはいいぞ（実は勉強の合間にアニメ全部見た奴）

ㄱㅇㅇ) サ———セン！

サボり後の学校ってきまずいよねって話

前回のあらすじ

学校サボっちゃった♡

どうも、生徒会なのに学校をさぼった小野寺唯です。

現在、朝ですが超絶行きづらいでございます…。まあ桃ちゃん先輩に来てって言われたので行くんですがね！

と、なんやかんやで学校DESSU！生徒会室前DESSU！

「お、おはようございませす…」

「ああ、おはよう唯ちゃん」

「来たか、唯」

「おはよう唯ちゃん！」

あれえ？皆さん普通だな？てつきり色々責められると思っただけ。

これは…もしかして呆れて何も言えないと言うやつか!?「もうお前には期待してないから」的な一周回って何も言われないパターンなのか!?

マズイですよこれは…こんな戦車道どころじゃねえや！何とかして関係を戻さなくては…

「あの…すいません。報告もせずに休んでしまつて」

「ん？ああ、大丈夫だよ。気にしないで」

「とりあえず西住の件だが、連絡した通り解決したのでな。今日は戦車道履修者の顔合わせと戦車を探させる予定だ」

「分かりました。それでは授業時には私も戦車を探しに「させるわけがないだろう。お前は事務作業だ」…はい、分かりました…失礼します」

立つ瀬がねえ！心なしか桃ちゃん先輩の態度がいつもよりドライな希ガス…。

マズイ……こうなったら事務作業を完璧にこなすこしでも印象を良くしなくては！

とりあえず、教室に向かおう……

教室に着いた……がその瞬間あんこうチーム（仮）に囲まれてしまった。

「あ、小野寺さん！昨日は大丈夫だった？」

「あ、ああ。大丈夫だ。だから気にしなくていい」

「ご、ごめんね唯ちゃん。一昨日はなk「そのことには触れないでくれ！」う、うん……ごめん」

「それですね、唯さん。私達戦車道を履修することに「その話は聞いた。これからよろしく頼む」はい。よろしくお願いしますね」

どうやら体の心配をしていてくれたらしい。優しさが身に染みるうううう！
あ、泣いたことに触れるのはNG。

「では今日から早速練習があるのでな、私は別件があるから今回は参加ができないがしっかりと取り組むように」

「もー！言われなくてもわかかってるってー！」

「ならいいのだけど」

武部さんの「もー」頂やしたああああ!!!

「ふふっ」

「?みぽりんどうしたの?急に笑って」

「あ、ごめんねー!ただ、小野寺さんと仲良くなれた気がして。ねえ小野寺さん。下の名前
で呼んでもいい?」

「!?…別に構わないが…(名前呼び…だと…!?!)」

「ふふっこれからもよろしくね。唯さん！」

「あ、ああ／／／」

「あー唯ったら照れてる〜。」

「唯さんにも可愛いところがありますね」

畜生また辱められた!!!

そして戦車道の時間。最初の集合には参加していたがその後はひたすら事務作業。

ア“ア“ア“事務作業たのちいいいいいい!!! (半狂)

てこんなことしている場合じゃねえ! 例の問題をどうにかしなくては…!

しかし会長達は外にいる。アピールもクソもないな。…うゝむ、どうするか…。

とりあえずこの書類は会長関係だし聞きに行くついでになんか飲み物でも持っていくか。

と、息巻いたはいいものの。誰もいねえ!! Why!?! は!?! もしかして俺がサボってないか確認しに行ったのか? もし今ここにいることがバレたら…

← 仕事中にお外出てた

←

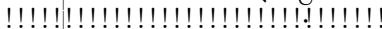
あ、あいつサボってんで

←

はーつつかえ。クビ。

MA・ZU・I!!急いで戻って弁明しなければ…!オオオオオ限界を超える俺の
足いいいい

アツ…



ん。朝から唯ちゃんの様子がおかしかったから独りにさせ続けるのもなあと思っ
て生徒会室に来てみたけど…

「誰もいないね。」

「おかしいな。トイレにでも行っているのか?」

「かもね。」

と、少し待ってみるが来ない。背中に嫌な汗が滴る…嫌な予感がだんだんと大きくな
る。

今日の唯ちゃんの様子がおかしかったのも、もしかしたら…。

「二人とも！探しに行くよ！」

「そうですね。流石に遅すぎる」

「早く行こう！」

二人の意見も一緒みたいだ。急いでいかなくても。こうしている間にも嫌な予感はどうも大きくなっている。どこにいるんだ唯ちゃん…！頼むから…。最悪なパターンでだけはなしてくれ…!!

こうして探しに出るが中々見つからない…。

「どこにいるんだ唯…（Pr rrr rrr）!!西住から電話…？」

「きつと戦車が見つかったんしよ。でも丁度いい。西住ちゃんと今その周りにいる子たちにお願いで一緒に唯ちゃんを探させて」

「はい…もしもし、河嶋だ。西住、緊急だが頼みがある…。…なにつ!!場所は!?!?…そうか分かった。今すぐ向かう！」

「どんな電話だったの？かなり焦っているみたいだけど」

「ああ、唯が倒れているところを西住達が発見したらしい。今保健室に運ばれたようだ。会長、今すぐ向かいましょう！」

「勿論！急ぐよ二人とも！」

やっぱり倒れてたか…！あの子はホントにもう…！

急いで保健室に向かう。あの子の親御さんに頼まれていることがあるからだ。

特定の症状の場合、悪化すれば命の危険があるためすぐに病院に向かわせなければならぬのだ

(それだけは……ないでくれよ唯ちゃん！)

そうして保健室に着く。入るとそこにいるのは西住ちゃんと他4人。そして…

真っ青に顔を染めて呼吸が荒い唯ちゃんがいた。

「唯ちゃん！聞こえる？私だよ、杏。聞こえてたら指動かして」

「ハア…ハア…」クイツ

(聞こえてはいる。意識が朦朧とはしていない…。純粋な疲労からくる過呼吸か…?)

どうやら最悪な状態ではないらしいので安心する。もつとも、親御さんから聞いた話では再発する可能性は限りなく低いとはきいているが。

「とりあえずビニール袋を当てさせて。かーしま！対処は分かっているね！穴はちゃんと空けてよ！」

「はい！」

「あの…会長！唯さんは…」

「大丈夫。疲労からくる過呼吸みたいだ。落ち着いたら病院に向かわせるから」

「もしかして、私達のせいでしょうか？唯さんはかなり言い寄っていましたし…」
「ど、どうしよ〜！」

そうこうしている間に唯ちゃんが落ち着いたみたいだ。無事だとわかっていても、やはり心配はする。

「唯ちゃん。大丈夫？落ち着いた？」

「…は、い…」

「まったく、生徒会室から離れて何やってたんだか」

「わ・・・t・・・し・、みなさん、に、きら、われ、t、かt、..。」

「はあ!?そんな訳ないだろ「かーしまうるさい」すいません…」

私達が唯ちゃんを嫌う…?そんな訳がないだろう。しかしこの子がこんなにも思い悩むなんて…。私達は誤解させる何かをしてしまったのか?この子に思い悩ませるほどの事を…。

「あの…倒れてた唯さんの傍に、飲み物が3つ…」

「ん?」

これは…私達のそれぞれ好みの飲み物だ…。唯ちゃん。君は…。

「とりあえず、寝てなよ。その後病院に連れて行くからさ」

「…」

どうやら寝たようだ。それにしても、

「私達に嫌われる…か」

「そんな訳ないのに…唯ちゃん…」

「まあ、今後また構おうか。それで唯ちゃんも気付くでしょ」

私達がこんなにも…君の事大切に行っているんだよ…？

もしかして私ってぬいぐるみか何かか?あ?

前回のあらすじ

我が生涯、一片の悔いなし！（死んでません）

どうも、意識が朦朧としてたらいつの間にか病院にいました。小野寺唯です。

いやホントに何で???????

ちなみに今、会長必撫でられています…だから何で????でもきもてい。

「唯ちやさん」

「〜♪なんですか？」

「唯ちゃんには38tの車長やつてもらうからよろしくね〜」

「…。…?…ウエッツ?!?!」

なんで?!なんでそうなった!?!

「な、なんで私が!?車長は会長がやった方がいいのでは？」

「んー…勘?」「勘て」

「じゃ、よろしくね〜。」

そう言つて会長は去っていった。…マジか。

○月?日

病院も退院し、ついに戦車道の練習をする時がきた。

よく良く考えれば会長が本気モードになれば射撃手になるし装填手も桃ちゃんパイセンになるから原作をズラさないっていう面ではいいのか…?

ちなみに退院日は皆やけに皆心配してた。あの目は知ってる、俺の事ハムスターか何かと勘違いしてるわ。そこまで貧弱じゃねえよ!ごめんやっぱそうかも。

○月△日

会長からの命令で戦車道の練習試合相手を探すことになった。ていうことで聖グロに電話凸した。ダージリンさんめっちゃ良い声でした。

○月□日

練習試合当日、ダージリンさんにお礼を言おうとしたらなんか驚愕した目で見られた。撫でられた。抱えられた。俺は○ツフィーじゃねえぞコラア!と威嚇するも無駄でした。ちゃんと解放はされたがなんか聖グロの皆さんの目が怖かった……。

結果?ちゃんと桃ちゃんパイセンは活躍してたよ。原作通り。アンコウ踊りは見えました。ちよつと楽しそうと思っただのは内緒。

私があの子の事を知ったのは練習試合を申し込む電話だった。聞けば大洗女子学園が戦車道を復活させたらしい。復活したばかりの戦車道…これはこれで面白そうだと思います喜んで受けた。

そして当日、

「おはようございます。あの、ダーズリンさん…ですか？」

私に話しかけてきたあの子を見た時に雷を撃たれた様な感覚だった。

「……ええ、ごきげんよう。私がダーズリンよ」

「…？本日は練習試合をお受けいただきありがとうございます。電話をさせていただきます。小野寺唯と申します」

「唯さん…ね。どうぞよろしく」ナデナデ

私は気付いたらこの子を撫でていた…！何を言っているか分からないと思いますですが、私にも分かりません。

「ウエ!?あ、あのダーズリンさん!?!」

「よっ」ヒョイ

「ウエエツツ!?!」

この子を抱えた時の第一印象は軽すぎた。あまりにも。戦車道をするのが危険なのではと不安になるほどに。

しかしそんなことを言う事は酷だと思い、頭を撫で続けた。…撫でる必要はない?可愛いんですもの、撫でるのは当然でしょう? (本音)

「んー!!んー!!私はぬいぐるみではありません!!離してツ!は・な・し・て・く・だ・さ・あ・ー・い!!」ジタバタ

「あらあら、失礼したわね。ごめんなさい」

「ゼエー、ゼエー…そ、それでは…会長及び隊長の方へご案内致します…」

「ええ、よろしく」

そうして大洗女子学園との試合は始まった。

抽選会、そして煽り合い

前回のあらすじ

私はぬいぐるみじゃない！

どうも、ダージリンさんにぬいぐるみのような扱いを受けて何とも言えない気分になりました。小野寺唯です。

聖グロ戦も無事負けてこれからの練習も気合を入れてえいえいむん！といったタイミングで会長から一言、

「明日抽選会だから、唯ちゃんも付いてきてねー」

「…はい?」

「じゃ、よろしくー」

クソツ！このロリ会長は報連相がなつちやいない！

「なんか言ったかな唯ちゃん??」グニグニ

「…にやんでにやいでーふ」

「大洗女子学園、八番！」

「サンダース高校…ですか」

「えー、そこって強いのか？」

「優勝候補の高校だな、聖グロ・サンダース・プラウダ・黒森峰、ここいら辺りが優勝候補の高校だ。マークしておくといい」

「おー…唯ちやんって物知りなんだねー」

「何事もやるなら本気が私のポリシーだからな。…それはそうとんだが」

一呼吸置き、

「なぜ私はあなた達とここに來ているんだ？」

「それは小野寺さんの上司に聞くことだな」

「くっ、あのロリ会長め…」

「唯さんの方がロリに近いと思うのですが」

「グあすいれあおhs」

「華！思つても言つちやダメ！ほら唯ちゃんおかしくなつちやつたじゃん！もー唯ちゃんしつかりして！ほらー！」

「おおよそ抽選会場でする会話ではないな」

「そう…私は今抽選會に來ている。…あんこうチームと一緒に。」

「会長はなんでこの組み合わせにしたんだ？私はあるこうチームには嫌われるのに何故…！」

「まあなんにせよ、強豪校に当たってしまったのは事実。早く学園艦に戻つて対策を立てなくては…」

「あ、待つてください唯さん！私達この後、ルクレールというところでお茶をするのですが一緒にいかがですか？」

「一緒に行こー！唯ちゃん！」

「…同行させてもらおう。」

可愛い子の誘いを断ることはできなかった…

「そういえば、唯ちゃんは二人のことは知ってるのかな？ ゆかりんとまこ」

「今更ですがお初にお目にかかります小野寺殿！ 私は秋山優花里です！」

「冷泉麻子、といつても私は小野寺さんの事は知っている」

「ああ、それは私も」

「あれ、なんで？」

「入試を二人で満点合格したからな、多少なり冷泉さんの事は聞いていた」

「まこでいい」「あつ私も！ 優花里とお呼びください」

「では私も唯と呼んでもらっても構わない」

「…」

「どうした西住「みほって呼んでください」…みほさん、そんなむくれた顔して」

「唯さんって生徒会と私達で話し方変えてるよね？」

「…何を。私はこれが素なんだが」

「唯ちゃんが倒れた時とそのあと、私達も一緒にいたの忘れた？」

「…／＼／＼」

「もー唯ちゃんも可愛いなく♡無理して堅い口調にしなくていいんだよ〜?」

「うつつうるさい! ほらケーキが来た! たべるよっ!」

「…唯さんも砕けた口調になったことだし、食べるか」「まこさん!」

そうしてなんやかんや話していると、やはり黒森峰が来た。

正直私はこのイベントが嫌いだ。エリカが面倒くさい腰巾着みたいになってるし、石に煽りすぎだろってちよつとイラついたし。

だから少し私も言い返す

「あなた達こそ戦車道に対して失礼じゃない? 無名校のくせに。」

「この大会はね、戦車道のイメージダウンになるような高校が参加しないのが暗黙のルールなのよ」

「強豪校が有利になるように示し合わせて作った暗黙のルールとやらで負けたら恥ずかしいな」

「っ!」

「そうやって戦車道を廃らせていくのが黒森峰の方針、いや西住流の方針か。西住流はよほど頭が悪く見える」

「なんですって!」「やめろエリカ。」ですが隊長! 今こいつは西住流を…!」

「事実エリカの言い方では彼女の言う通りになってしまふ。私達はむしろ戦車道を広げていく身だ。そういうった発言は看過できないぞ、気をつける。エリカ」

「…はい」

「私達は帰るとする。騒がせて失礼した」

「構いませんよ、ただ忠告しておきます。部下の手綱はちゃんと握っておくことです。先程の発言が黒森峰惹いては西住流の評価に繋がることを理解できないような教育するのはどうかと」

「…。気を付けよう」

こうして黒森峰との口撃戦は終了したのだった。

「唯さん随分と饒舌でしたね」

「ええ、ついカツとなつてしまひ。失礼した。みほさんの姉に対して」

「みぼりんのお姉さんにだけなんだ…」

「うん…ありがとう唯さん」

「え何で？」

「フフツ、何でもないよ♪」

唯さんはやっぱり優しいんだと実感した。エリカさんとの言い争いは、きつと私に対する目を少なくするためにしたんだ。

優しい優しい唯さん。敵を多く作ってしまいそうな唯さん。せめて私達が、彼女を分かたせてあげないと。

「フフツ」

「…みほさんは何で撫でてるんだ？」

「なんでもないよー」

「じゃあ撫でるな」

「あ、じゃあ私も唯ちゃん撫でよー」

「ヤメロオ！」

「可愛いですな唯さん」

「可愛いとか言うな！」

「あの…私も唯殿を撫でさせてもらいます！」

「了承をとつてからしろ！…いや承諾なんてしないからな!？」

「諦めろ唯」

「そんなっ！え、いつの間に敬称略した？」

「じゃあ私も唯って呼ぶね」

「みほさ「みほ！」みほはまず頭を撫でるのをやめろ！」

「あ、みほりんだけずるい！私も沙織って呼んでよお」「では私もお願いします」「私も呼び捨てでお呼び下さい！」「…私とかまわない」

「…わかった！わかったからあ！頭を撫でるなあー！！！！！！」

こんな日がずっと続きますように。

その後の小野寺唯

後々エリカやまほに言いすぎて嫌われたなど一人で落ち込んでいた

サンダース戦前

前回のあらすじ

調子乗りすぎました…

それはそれとして今日は優花里さんがオットボールさんになる日らしいです。朝確認しました。サンダース戦のケイさんとの絡みが楽しみですねえ！

〈そしてなんやかんやサンダース戦当日〉

来ました初公式戦！…いざとなるとやはり緊張するなあ…。

「ハアイ!!オットボール三等軍曹!」

「あああ!見つかっちゃいました…」

お、いつの間にかケイさんが来たようだ。仮にも生徒会に所属している身。挨拶しなければ…。別に推ストカデハナイヨ…?

「ケイさん。こんにちは生徒会の小野寺唯と申します。先日はウチのメンバーがお世話になりました」

「……………」ボ

「……………」?

「…………ベリ……キューートねこの子!!!」ギュー!!

「むぐぐぐうううー！！！！（またこの展開かあああ！！！！）
「唯殿おとおおお！！」

なぜ私はこんなにも抱き着かれるんだ!!!

友好を深めに、オットボール三等軍曹を見つけたから話していたら…もんの凄く可愛
い子に会っちゃった!!

「ねえアンジー？この子もらつてもいい？いえ、ちようだいな！」

「…な、なあに言ってるのかなー？アメリカンジョークキツイってー」ピキピキ

「NONO！そんなに怒らないでよー。んーそうねー…。唯ちゃん、だっけ？」

「ひ、ひゃい…」

んー、なんでこんなに可愛いのかしら！

「この一回戦、私達が勝ったら私達の所に遊びに来てね♪」

「あ？」

「じゃあーねー！」

ふふ…元々やる気だったけど、さらにやる気が出てきたわ！

「隊長…、またあんな無茶振りを…。困ってたじゃないですかあの子」

「でもアリサ、彼女とてもキュートだったでしょ？」

「…それはそうですが」

「でしょ！あんな可愛い子には、是非とも私達の学園艦に来てもらいたいわあ！」

「はあ。もういいです…」

（とか言いつつ…私もあの子が気になってるし…。やっぱり無線傍受機アを使うか？）

一回戦、勝つわよ!!

サンダース戦（ダイジェスト）

前回のあらすじ

負けたら（サンダースに）左遷

どうも、小野寺唯です。絶賛アリサ車を追っかけています。

なお原作よりかなり早い段階です…なぜえ!?

いやすみません私です。傍受機の事とアリサさんの場所（うろ覚え）を早々にゲロつたので原作より尺がかなり縮まりました。

そのダイジェストをお送りしましょう。

…

…

…

・
:
:

試合開始に伴いウサギさんチームとアヒルさんチームが偵察に偵察に出て囲まれた時…

「…」

「どうした唯、そわそわして。何か気になることでもあるのか？」

「い、いえ！ベベベツニナンモナイツスヨ？」

「唯ちやくん？」

「びい」

「素直に言おっか？」

「ひゃい…」（怖）

こうして私は通信傍受機の事を暴露する羽目となりました…

唯ちゃんが何やらそわそわしてるし明らかに何かを気にしている様子なのに素直に言わないから無理矢理吐かせた。まったく…少しは私達を頼ってほしいもんだ

「今は通信環境を切りましょう。…サンダーズの動きが違和感しかありません。いくら私達が無名校で車両数が少ないからって、こんなドンピシャに9両も向かわせますか？ まるでこっちの事を完全に把握しているみたいじゃないですか。それで考えながら上を見上げたら…」

「上？」 ちらっ

そこにはなんと通信傍受機が打ち上げられていた

「ね？そりゃ行動筒抜けにもなりますって」

「おのれサンダースめ……何が正々堂々だ！ 思いつきり不正しているじゃないか!!」

「とりあえず西住ちゃんに連絡しよつか……ていつても通信が使えないのか……参ったねこりゃ」

「あるじゃないですか、方法」

「……ん？」

「ケータイ」

「……ああ」

「唯ちゃん頭いいねー」

「至急西住に連絡します！」

「それで？ まだあるんでしょ唯ちゃん」

「ギクツ……なんで分かったんですか？」

「唯ちゃんは分かりやすいんだよ」

「……はあく……あくまで個人的な考えですが、通信傍受機を使用するのはフラッグ車だと思われます。そんなでもって報告にフラッグ車が見られないことは護衛と共にぬくぬくと待機してるんじゃないかと思われます。で、敵の開始地点から予想するに……」

それから出るわ出るわ唯ちゃんの納得しかない推理が。それを西住ちゃんに報告、偵察を出したらドンピシャ。こりやすごいね…

ああ、そういうえは唯ちゃんつて天才だったね。普段可愛いしポンコツだし可愛いから忘れてたよ…

そこから始まる予定調和よ…。

フラッグ車は見つかると、鬼ごっこは始まるしきつとアリサさんは怒られてケイさんはスポーツマンシップで車両を減らしてくるだろうし…うーんこの。

・
・
・
・
・
・
・

で、今の状況が産まれたわけ。この何とも言えない物足りなさよ…

あ、隊長車が離れた…いいよいか…

「柚子先輩！隊長車が絶対決めてくれます！意地でも当たらないように回避行動意識
！」

「分かったよ！」

「桃ちゃん先輩は少しでもいいから発砲して敵の攪乱をしてください！撃破できればな
およし!!（あ、でもどうせ外れるか…）」

「桃ちゃん言うな！あと心の声漏れているからな！絶対に撃破してやる…！」

「おおうがなばれー」

「会長は装填少しでも早く装填をし「はいよー」…ならいいです」

私は何故こんなに必死になっているかというところ、まあ私の責任ですわねはい。私のせいで原作と少し状況が違ってきていることによるズレを恐れているのです。

頼むぞ…隊長…！

私達は一回戦を勝ち抜いた。かなりギリギリの勝利だったけど…唯さんが通信傍受機とそこから考えたフラッグ車の予測が無かったらもしかしたら負けていたかもしれない…そう思うと唯さんの凄さが改めて分かる。

「みぼりーん。そんな考え込んでどうしたの？」

「あ、沙織さん。何でもないよ。唯さんはやっぱりすごいなって思ってたんだ」

「そうだね。一回戦、唯のおかげで勝てたっていつも過言じゃないよね！」

「そうですね！やはり唯殿の地頭の良さがうかがえます！」

今後は唯さんに積極的に作戦会議に出てもらおうかな…たくさんお話しできるし！

よしー！

DOKI DOKI! アンツイオ高校潜入! (無許可)

前回のあらすじ

サンダースRTA更新してもうた

どうも、無事に一回戦突破しました。小野寺唯です。
突然ですが問題です。私は今どこにいるでしょう？

.....。

ふむふむ、では正解を発表しましょう！

私は今…

「唯殿！大丈夫ですか!? やはりもう少し大きな船で行けばよかったですか
?」

「ウツプ…ダ、ダイジョウブウオロロロロロロロロロロ!!!」

「了解しました。一度失礼します」

「後唯ちゃん。最近調子良いみたいだから無理をしない限りなら唯ちゃんも捜索に出よっか。一人は厳禁だけど」

「…え? いいんですか?」

「会長! 唯にはまだ早いのではないですか!？」

「いんや、変に抑えてても勝手に暴走するのが前回で分かったからねー。それならいつそ誰かしら一緒にいて探していた方が安全だと思うよ。ねー唯ちゃん?」

「うう…」カアアア／／／

((((かわいい)))

奇跡の全員一致である

「てなわけがんばろっかー。」

「「「はい!」」」

「とういわけでこちらの捜索隊に参加することになりました。皆さんよろしくお願いいたします」

「よろしく願います！唯殿！」

「歴女の皆さんとは面識がありませんでしたね。小野寺唯です。生徒会所属で庶務を担当しています」

「カエサルだ、よろしく。それと我々は同じ二年だから敬語は使わなくてもいいぞ」
「わかった。ではそのようにする」

―以下省略―

「あの皆さん。それですね…。唯殿はお身体があまり強くないので、何かあった場合は私達で対応することになるので、よろしくお願いします」

「なるほど、了解したぞグデーリアン」

「つまり石原莞爾か！」

「…普通に竹中半兵衛でいいのでは？」

「…「それだ！」」

「君のソウルネームは竹中半兵衛だな！」

「ええ…、まあいいけど…。そろそろ行きましようか」

「ええ!?お身体は大丈夫なんですか!?あとカバさんチームの名残残ってますよ半兵衛殿
!」

「うるせえナポリタンが待つてるんだイクゾー!!」

「さてはそれが目的ですね半兵衛殿!」

ナポリタン…:ナポリタンはどこ…:う…ここ…:う?

一方そのころ生徒会

「会長!桃ちゃん!唯ちゃんが優花里さんとアンツイオに^潜入^入にデートしに行きました!!」

「ファツ!?ウーン…:」(ピーチ)

「絶許」ピキピキ (アプリコット)

戻ってアンツイオでは

「おい材料もつと持ってこい！間に合わないぞ！」

「良いねあの子！滅茶苦茶食うじゃない！」

「パクパクですわ！パクパクですわ！」モグモグ

「唯殿いい加減に正気に戻ってくださいー！早くしないとアンツイオの調査できなくなってしまうすう！」

てな感じでしたとき（作者の脳の限界）

アンツイオ潜入～キャラ崩壊を添えて～

前回のあらすじ

アンツイオのごはんおいしいね♡

「どうも、無事（無傷とは言っていない）アンツイオに潜入しました。小野寺唯です。ごはんがおいしくて理性が保ってられません。ではさようなら」

「唯殿いい加減にしてください調査が一生終わりませんいやホントに」

「おっとさすがにダメですか。ではこのナポリタンでラストにしますか。」

「それにしてもアンツイオの料理は本当に美味ですね。提供も早いしあのペパロニが作ってくれるパスタだと考えると余計にお腹が空いて…お腹が空いて…」

「お腹が…空いて…」

「すみませんあともう一皿だ「唯殿？」すみません」

「ごめんなさい行きましょう。」

「もう…。さあ、早く行きますよ！唯殿が暴走してる間に噂の戦車がコロッセオで披露

「されてるといふ情報を得ましたので」

「おお、素晴らしいな秋山優花里君。君の情報収集能力には目を見張るものがある。自慢していいんだぞ」

「もう最初の頃のクールな唯殿はいないんですね…。少し悲しいけど不肖この秋山優花里、悲しさを乗り越え前に進みます」

「おっとそれ以上は止めてもらいましようか…ロリ少女が泣き叫ぶぞ…?」

「かわいそうにきつと自分の精神年齢を自覚されたのでしょうか」

「てめえいつペン表出ろ」「表ですが?」

私の知っている優花里さんどこ…?」

コロッセオ

「あれが噂の戦車か。優花里、あれはなんだ?」

「あれはP40型重戦車ですね。34口径75mm砲装備のイタリア最強戦車ですよす

イター。」

「良かったいつもの優花里だな」

「?とりあえずもう少し近づいて情報を聞き出しましょう!」

近くで見たいだけでは…聞きたいだけでは…小野寺は訝しんだ。

そんなこんなしてぼーっと見ていたら、まさかまさかのドゥーチエアンチヨビから御声がかかった…なんで?

「おっ! 君も我らの重戦車を見に来たのか可愛い幼女よ!」

「幼女じゃないです (ガチギレ)」

「そうっくんけんしなくていいぞ! ほら、君には特別に乗せてやろう!」

(これキレていいですよね…?) ピキピキ

(丁度良いですよ唯殿! 幼女を装って色々聞き出してください!)

(優花里あなたはいつか絶対に絞める…!!)

とか言いつつそれが一番効率が良いのが理解できるから余計に辛い…!!

くっつそ精神年齢40歳越えに幼女キヤラはキツすぎる…!

(帰りにパフエ奢りますので!)

(いざ尋常に勝負)

パフエに罪はないので

「グエツゲホツヴン!!! (調声) ドゥーチエのお姉ちゃん! このかつこいいせんしやつて

「どれだけつよいのー?」

「ブフォー!」「ブチ殺」

「おおお!こんなに若いのに戦車道に熱心なんだな!この戦車はP40型重戦車といつてな!ソビエトT-34戦車の影響を受けた戦車で強力な34口径75mm砲装備のイタリア最強戦車としてペラペラ」

「お、おう」

(唯殿!できれば作戦まで聞いてください!)

(無茶振りだろ!流石にドゥーチェともあろう人が作戦をバカみたいにペラペラ喋る訳ないだろいい加減にしろ!)

(パフエ)

「ドゥーチェお姉ちゃん!わたし、つぎのしあいどんなせんりやくでかつのかきになります!!」パアア

(ちよろいですね)

「それはなあ。うちの戦車の速さを活かして戦車の模型を置いて相手を惑わすんだ。それで相手が攻め時を考えている間に裏に回り込んで奇襲する!これで西住流率いる大洗女子でも絶対に勝てる!じゃなくて勝つ!」

「お、おー!すーい!」

(この人バカだったわ。いやお人好しというべきか…?)

(ナイスです唯殿！後はこれでバレずに撤退すれば完璧です！)

「ドゥーチェさん！つぎのしあいもがんばってください！おうえんしてます！」

「おお！ありがとう！可愛い子の君の期待に応えられるよう頑張るからな！」

ギャアアア!!綺麗な眼差して私の良心が悲鳴を上げている!!違うんだこれも秋山優花里つて奴のせいなんだ！私悪くない！

「ドゥーチェさん！うちの妹に構っていたきありがとうございます！ほら、唯、お礼しなさい」

(!?)「あ、ありがとうございます…?」

くっそこの戦車キチ急なアドリブ付け足しやがった…!

(誰が戦車キチですか)

こいつ直接脳内に…!?

「おう！姉妹仲が良くていいな！次の試合期待してくれよな！アリーヴェデルチー！」

「さようなら〜！」

「ば、ばいばい！ドゥーチェお姉ちゃん！」ニッコッ

ここれで良かったのだろうか私達の潜入調査…。

てなわけで戻ってきました大洗。帰りはちゃんと酔い止め買って飲んだので問題ありません。

「秋山優花里、只今帰還致しました！」

「同じく小野寺唯、戻りました。」

生徒会室にはやはりカメさんチームとあんこうチームがいた。

…ハッ、殺気!? 生徒会チームから!? なんてやそこまで怒ることないやろ! 戦果持ち帰ったから勘弁してださいツツ!!

「おかえりー唯ちゃん。そしてあ・き・や・ま・ちゃん?」

あれ? 私じゃない?

「まあ言いたい事は山ほどあるが…。待っていたぞ」

「優花里さん…。ひよつとしてまた…。?」

「は、はい! とりあえずご覧ください! 生徒会の皆さん。これを見ればきつとご理解い

『ドゥーチエのお姉ちゃん！このかつこいいせんしゃつてどれだけつよいのー？』

「ブツ

「に、西住ちゃんが死んだ！」

「この人でなし！」

『ドゥーチエお姉ちゃん！わたし、つぎのしあいどんなせんりやくでかつのかきになります！』 パアア

「ハウウ」

「その他あんこうチームも死んだ！」

「この人でなし！」

『ば、ばいばい！ドゥーチエお姉ちゃん！』 ニコッ

「「ゴフウ!!!」」

「カメさんチームが死んだ!」

「この人でなし!...じゃねえわ!なんなんですかこれ」

辺り一帯に血の池が...これどうするんでしょうか...まさか私か? 私が掃除するの
か?

この後、映像を取引する戦車道履修者が続出したとかなんとか...

それとアンツイオ戦って、何故か時間を飛ばさないといけない気がするんですね。

という事で。

『フラッグ車走行不能!よって、大洗女子学園の勝利!!』

勝ちました。
はい。